

エコロジーとデモクラシーの接点からみた
持続可能性のための幼児教育
—森のムッレ教室と日本での実践から—

光橋 翠

地球規模の環境問題が深刻化するなかで、近年、幼児教育の実践のあり方を変えていく必要性が議論されている (Davis & Elliott, 2014)。なかでも、現在、研究者のあいだでは子どもの自然体験の位置づけについて (Inoue, et al., 2019)、そして持続可能性の取り組みへの子どもの参加について (萩原, 2020) 議論されている。そこで本研究では、自然体験の位置づけについてはエコロジー (生態学) の問題として、子どもの参加をデモクラシー (民主主義) の問題として捉え直した。そのうえで、本研究の目的を、エコロジー (生態学) とデモクラシー (民主主義) の概念を結びつけることで、子どものためのエコロジカル・デモクラシーのあり方を模索し、スウェーデン発祥の幼児対象の野外教育手法である森のムッレ教室 (以下、ムッレ教室) を手がかりに、持続可能性にむけた日本の幼児教育の可能性を検討することとした。本研究では、この目的のために理論による研究と実践による研究を行った (第1章)。

まず、理論による研究では、エコロジー (生態学) に関しては、日本の幼児教育のガイドラインの一つである「幼稚園教育要領」(文部科学省, 2017) を検討した。その結果、そこには自然界を自然科学としてのエコロジー (生態学) の観点から捉え、それを人間社会が適応すべき対象として考える視点が十分には含まれていないことが分かった。一方、デモクラシー (民主主義) に関しては、日本の幼児教育でデモクラシー (民主主義) についての議論がほとんどなされてこなかった背景として、「発達 (development)」という概念に着目して検討した。その結果、子どもを発達途上の存在として捉える子ども観が子どもの社会形成への参加の実現を難しくしていることが示唆された。(第2章)。

そこで本研究では、子どものためのエコロジカル・デモクラシーに示唆を与えるものとしてエコソフィという思想に着目した。エコソフィを提唱したのは、ノルウェー人哲学者アルネ・ネス (1912~2009) とフランス人精神分析家フェリックス・ガタリ (1930~1992) であった。二つのエコソフィには、世界とのつながりのなかで「生きている (being)」という人間存在のエコロジカル (生態学的) なあり様から得た洞察をもとに、未来を「生きていく (becoming)」ための英知を自ら見出していくというデモクラシー (民主主義) 的なアプローチが共通の特徴として見出された。そのうえで、専門領域を異にするネスとガタリのエコソフィを結びつけていくための認識論として、アナ・チン (1952~) とグレゴリー・ベイトソン (1904~1980) の論考に依拠して、意味世界に潜在する自然界のコモンズ (他種との共有財) に気づいていくまなざしを論じた。さらに、ガタリのエコソフィをもとに、「創発 (emergence)」の概念を幼児教育に取り込む可能性を論じた。ガタリは、私たちを取り巻く環境の諸要素、すなわちアッセンブリッジによって多様に創発される主観性をいかに倫理的な創造へと向かわせるかを思索した。これらの検討からは、子どものエコロジカル・デモクラシーのあり方の一つが見出された。それは、世界と出会い、深く関わることによって子どもと保育者が意味世界にいながらにして自然界に潜在するコモンズを感じとる過程で、そこから立ち現れる倫理感や責任感を持続可能な社会への変容に結びつけていくアプローチであった (第3章)。

次に、実践による研究では、幼児教育にエコロジー (生態学) の学びを世界でもいち早く取り入れた、スウェーデンのムッレ教室を対象とし、スウェーデン及び日本においてそれぞれ調査した。まずスウェーデンでの調査では、ムッレ教室の思想的基盤には野外生活というスカンジナビアの伝統文化があること、

また、自分もまた自然の一部であるという感覚のもとに持続可能な社会変革に参加することを希求するアルネ・ネスを中心として展開されたスカンジナビア発祥のエコソフィの思想が特定された。また、子どものためのエコロジカル・デモクラシーへの実践上の示唆として、①人間と自然の関係性を見つめる場として自然を捉えること、②探究によるエコロジー（生態学）の学びを取り入れること、③自然への参加意識を育むことなどが見出された（第4章）。さらに、スウェーデンのムッレ教室で生まれている自然観について調査した。そこからは、保育者が幼児教育実践の場である自然は、人間だけでなく多様な他種によっても共有されており、生きものたちにとってのコモンズであるという世界観を子どもたちと分かち合っていることが分かった。ここからは、①自然をコモンズとして捉えるまなざしを保育者が子どもと分かち合うこと、そして②子どもを社会的存在として捉えることが示唆として得られた（第5章）。

また日本での調査では、ムッレ教室を取り入れた保育園でのフィールド調査をもとに、子どもたちの活動がどのように持続可能性のための取り組みと結びついていったのかを明らかにした。具体的には、9つの事例を検討した。その結果、子どもたちには、流域を探索する活動を通してさまざまなアッセンブリッジ（景観の構成要素）に出会う過程で自然環境に対して倫理観や責任感が立ち現れていたことが明らかとなった。そして、保育者たちはそれらを持続可能性の具体的な行動に結びつけていった。そこで、子どもたちの自然界の探究から創発される倫理観や責任感を持続可能性にむけた変革に結びつけていくアプローチを「持続可能性にむけた変容のための創発の教育学（emergent pedagogy for sustainability transformation）」と呼んだ（第6章）。

「持続可能性にむけた変容のための創発の教育学」とは、次のようなものである。まず、私たち人間が自然界におけるエコロジカル（生態学的）な関係性のなかで「生きている（being）」ことを日々の生活で実感できるように、幼児教育を取り巻くアッセンブリッジ（環境の諸要素）を、子どももまた自然の参加者であること、また自然を他種との共有財（コモンズ）であることを実感できるような形で構成することである。そして、そこから派生した子どもたちの問いや好奇心を出発点として探究していく過程で、世界とのつながりを深めるなかで新しく創発された主観性に注意深く耳を傾けて、明日の活動や生き方という「生きていく（becoming）」ための視点に活かしていく教育学である。このような偶発性を含み込む活動のサイクルにおいて、子どもの新しい主観性を見出す可能性は、活動を振り返るリフレクションと活動の記録であるドキュメンテーションを通して広がる。そして、ときに子どもや保育者には倫理感や責任感が出現していることがある。そのような機会を捉えることで、幼児教育の実践のなかで持続可能性にむけた社会変革に子どもと大人が協働的に参加していくことができる（第7章）。

最後に、本研究の結果をもとに、持続可能性にむけた日本の幼児教育の可能性が三点見出された。一つは、子どもの発達という視点を超えて、人間と自然の関係性を探究するための生活哲学の場として園外保育を捉えること、二つに、子どもがエコロジー（生態学）を学ぶことは持続可能性にむけた変革に参加する道を切り開くということ、三つに、園として子どもの声を聴く文化を醸成することで持続可能性にむけてより豊かで多様な変革が実現されうるということであった（第8章）。本研究で取り組んだ、幼児教育においてエコロジー（生態学）とデモクラシー（民主主義）を結びつける試みは、今後、実践者と研究者に広く吟味されることで、持続可能性のための幼児教育の新たな展開を創発させるものとなることが期待される。